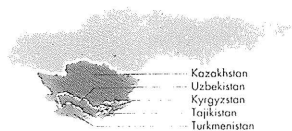


## 第5章 停滞の時代か、黄金時代か



スターリンの死は、一つの時代に幕を下ろした。これを契機として、ソ連中央ではフルシチョフとブレジネフ、そしてウズベキスタンでは共産党第一書記ラシードフらの新たな指導者が、政治の最前線に登場する。特に、ブレジネフとラシードフがソ連およびウズベキスタン共産党の指導者として君臨した時代は、これまでになく長期にわたったため、この時代の評価は人によって大きく異なっている。この時代を停滞の時代と考える人もいれば、ソ連およびウズベキスタンの黄金時代と考える人も少なくない。

### 1. 新しいリーダーシップの時代

#### 1.1 記憶の希薄なフルシチョフ時代

1953年に共産党第一書記に就任したフルシチョフ（1894-1971）は、スター



フルシチョフがウズベキスタンを訪ねた際のタシケント空港での記者会見。

リン時代の失政を暴露、批判したことで知られている。特に、1937年以降の行き過ぎた粛清を批判したことは、歴史家や国民から評価されている。スターリン独裁体制の後継者と目されていたベリヤを排除したことも重要である。

ソ連がスターリン時代の独裁体制から共同指導体制に移行したのは、フルシチョフが行った1953年の反ベリヤ・キャンペーンの結果と解釈することもできるだろう。彼自身の友人や知人を含め、スターリン時代に不当な罪で抑圧された人々の名誉回復が行われたのもフルシチョフ時代のことである。このほか、世界初の有人宇宙船の打ち上げ成功や核兵器開発の進展、ベルリンの壁の建設によるソ連の安全保障ベルトの構築などは、ソ連の国際的な立場を強化したとして、フルシチョフ時代の成果に数えられることがある。

しかし、低迷する経済の立て直しを試みたものの、それは失敗に終わることが多かった。むしろ、農業改革の一環としてトウモロコシの栽培を促進した結果、店からパンが消えたことを思い出す人は多い。フルシチョフのことを「コーン作り」と記憶している人も少なくない。また、政権の課題の一つに国民に対する住宅の供与があったが、建設された住宅は狭く、多くの場合、台所やトイレ、風呂が小さかったために人気がなかった。人々は、皮肉を込めてこれを「フルシチョフカ」とよんだ。

フルシチョフに対する人々の評価はあまり高くなく、記憶にも鮮明な形では残っていない。スターリンのようなカリスマ的な存在と比べると、フルシチョフへの尊敬度はかなり低かったように見える。

## 1.2 ブレジネフ書記長の登場

ブレジネフはスターリン時代に育ち、革命後に成人して共産党に入党した世代としては初めての書記長である。ブレジネフの世代は革命時にはまだ若く、革命運動に参加した経験はなかった。彼らは革命世代の後継者として幹部となった。彼はフルシチョフの失脚後、ソ連共産党第一書記に選出され、コスイギン大臣会議議長（首相）やポドゴルヌイ最高会議幹部会議長らと他の共産党幹部の集団指導体制を構築した。

ブレジネフは、1906年ウクライナで金属工場の労働者の家庭に生まれた。一家はウクライナに住むロシア人だった。その後、彼は家族とともにクルスクに

移住し、製鉄所で働き始める。

彼の共産党でのキャリアはコムソモールに加わったことから始まる。この点で、彼は革命に参加し、ソビエト政権の成立過程で経歴を作った前世代の共産党幹部とは異なっている。ブレジネフは、コムソモールの活動家を大学などで学ばせ、共産党幹部や各地の産業指導者などとして育成するという新しい方針の下で成長したリーダーの一人であった。実際、彼のようにコムソモールを経て昇進するリーダーはしだいに多くなった。一般国民も、そのようなシステムや時代の雰囲気や時代を次のように記憶している。

当時の教育・人事制度は、オクチャブリヤト、ピオネール、コムソモールを経て共産党に入党することになっていた。いったん入党すると、権力を手にした人々の仲間入りをしたような気になった。共産党員であるというだけで、周りの扱いはまったく違って来るが、裏を返せば、共産党の言うとおりに動かなければならないということでもあった。

党員の生活水準はある程度のレベルが保たれ、安定していた。特に何かをめざしてがんばったり、強く望んだりする必要もなかった。貧富の差はあまりなく、誰もが似たようなアパートや車を持ち、結婚式まで同じようなものだった。もし誰かが何らかの理由でお金を得て、少し大きめの家を建てたり、おしゃれな車を買ったりすれば、すぐに当局が身辺調査を行い、どこからの収入でそれらを手に入れたのか調べられたものだ。

就職に関して言えば、仕事はたくさんあった。専門学校や大学の卒業証明書があれば、就業を拒否する機関はなかった。どこの機関や工場でも人手が足りず、就職希望者の全員を雇っていたものだ<sup>1)</sup>。(証言者 No. 44, ウズベク人, 男性, コーカンド)

ブレジネフのもっとも大きな功績は、1956年にカザフ共和国共産党第一書記の時に推進した処女地開拓事業である。この事業が成功したことから、ブレジ

---

1) このようなソビエト政権の体制が人々に安心感を与え、生活や将来に対する自信もたらした。この考え方は、Valentin Tolstykh, *My byli : Sovetskij chelovek kak on est'*, Moskva : Kul'turnaia Revolutsiia, 2008にもみられる。

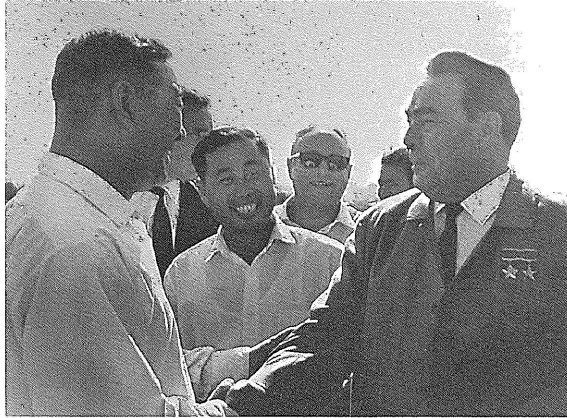
ネフは1956年にモスクワに呼び戻され、共産党の中央委員会候補および共産党中央委員会書記として軍事産業などを担当した。彼はこの時期にフルシチョフ第一書記の引きを得て、あらゆる場面でその支援を受けた。その代わりに、ブレジネフもフルシチョフの方針を支持し、それに逆らうことはなかった。2人のつながりは、彼らが歴任した共通のポストにもあったが、ブレジネフがフルシチョフの指示通りにものごとを進めたことで、両者の関係はいつそう深まっていた。このようなパトロン・クライアント関係のおかげで、ブレジネフは最高位の役職まで上ったと言われている。

しかし、60年代になるとソ連の経済問題が深刻化し、フルシチョフの「頑固」で「辛口」の人柄に対する反感から、フルシチョフのリーダーシップに対する疑問の声が共産党内のみならず国民の間でも強まった。こうして、ブレジネフにもフルシチョフとの関係を考え直す時期が訪れた。それはブレジネフが共産党幹部による、1963年から64年のフルシチョフ追放計画を黙認することにつながっていく。彼はこの計画に積極的に参加することはなかったが、それに強く反対することもしなかった。

### 1.3 指導スタイル

ブレジネフの政治スタイルは、リスクを犯したり何かを決断したりというよりは、安定とバランスを保つことに特化したものであった。それが彼の強みでもあり、弱みでもあった。ブレジネフは問題が起こっても決断を急ぐことはせず、専門家や関係者と相談する機会を設け、長い時間をかけて解決にあたっていた。

ブレジネフのもう一つの特徴は、温厚な政治家だったことである。責任者が何らかの失敗をし、側近から厳しい対応や刑罰を求める声があがっても、ブレジネフはスターリン時代に戻ることを恐れ、厳罰を与えることは避けた。彼は対立や恨みを買うことを避け、党幹部が何か間違いを起こしても、解任して年金生活に追い込むことはせず、わずかな降格人事で対応するのが常だった。幹部に大きな失敗があっても、ソ連大使として国外に送ることで処理することもあった。彼は、予測不可能な行動をとり、失言の多かったフルシチョフとは正反対で、会議出席者からの意見を求めるなど、多くの人に発言のチャンスを与



ブレジネフがウズベキスタンを訪問した際の農民との交流の一時。

えたという。

私生活では狩猟を好んだ。年を取るにつれ、彼はより多くの時間をクレムリンの外で過ごすようになり、狩猟の機会はますます増えた。彼の機嫌をとるために、近くに猪を走らせ、それを撃たせるといった演出も行われた。そこではプロのハンターが密かにブレジネフと同時に射撃することによって撃ち損じを隠し、書記長をいつも上機嫌で帰したという。

また勲章やメダルをこよなく愛したことで知られ、彼にはかつて前例がないほどの勲章が授与された。その数は200ともいわれる。一生に3度までしか与えられない「ソ連邦英雄勲章」を4回、大規模な軍事作戦を成功させた軍人にものみ与えられる「勝利勲章」までもらっている。それに加えて「社会主義労働英雄勲章」、「レーニン勲章」を8回、「十月革命勲章」と「赤旗勲章」を各2回、「大祖国戦争1級勲章」、「赤星勲章」など枚挙にいとまがない。勲章に対する執着は、彼が若い時分に他の幹部と比べて与えられる機会が少なかったからだと言解する人もいる。

ブレジネフが勲章好きであることは周りの幹部も気付いており、ここでも彼の機嫌をとるために様々な勲章を事あるごとに贈っていた。海外の社会主義国の指導者もこうしたブレジネフの弱点を知っており、数え切れないほどの勲章

やメダルを贈った。

ソ連では指導者が死亡すると授章した勲章を示しながら、遺体とともに墓地まで運ぶ慣行があったが、ブレジネフの場合、それはとても大がかりなものとなった。ブレジネフの前に亡くなったスースロフの葬儀では勲章を持ち運ぶ軍人は15人だったが、ブレジネフの場合、その数は44人にも上った。このような勲章への異常なまでの執着は国民にも知られており、彼を「勲章コレクター」とよぶ人も少なくなかった。

ブレジネフはウズベキスタンでも冷やかな目でみられていた。やがて指導者の行動に呆れた人々は、彼をユーモアの対象にしたり、アネクドートの主人公にしたりするようになった。例えば、次のような証言がある。

ブレジネフは最後に近づくほどおかしくなってきた。「ソ連邦英雄勲章」や「社会主義労働英雄勲章」などを自分に与え始めたのだ。それを知って全ソ連国民が笑っていた。

彼は自分の周りに追従者ばかりを集めて（国家を運営し、国民の前に出る時には、沢山の勲章をスーツに付け、あらかじめ準備された文書を棒読みするばかりの）まるでコメディアンのような姿をしていた。一国のリーダーともあろう者が、こんな振る舞いをして恥ずかしくなかったのかと思う。この時期は確かに停滞の時代だった。（証言者No. 6, タタール人, 女性, タシケント）

#### 1.4 書記長としての働き

ブレジネフは温厚な人柄にもかかわらず、厳しい決断と処置を取らざるを得ない時期もあった。まず、1968年チェコスロバキアで起きた「プラハの春」がある。この事件の契機となったのは、当時のチェコスロバキア首相ドプチェクによる「人間の顔をした社会主義」への転換の試みであった。しかし、それはソ連政府やブレジネフからすると、社会主義建設の路線から外れることを意味していた。チェコスロバキアのみならず近隣の社会主義国にも影響を及ぼす危険があり、最終的にソ連の影響下にある社会主義諸国の結束を弱めることになると危惧したのである。ブレジネフは、ドプチェクの「誤り」を強く批判した。

そして、チェコスロバキアの改革を抑えるために、集団防衛権を発動し、ワルシャワ条約機構軍をプラハに派遣した。こうしてブレジネフはプラハの危機を抑え込み、自分は必要に応じて強硬な手段に踏み切ることができるというメッセージを発したのである。これは、社会主義体制とソ連の勢力圏を防衛するためであれば、ソ連は集団防衛権を発動して東欧諸国に介入するという考えの現れであり、それはブレジネフ・ドクトリンとよばれるようになった。

同じく厳しい決断を強いられたもう一つの事件は、1979年12月のアフガニスタンへの軍事侵攻であった。それはソ連中央アジアに隣接するアフガニスタンの社会主義政権を支援することを目的としていたが、内戦の激化とともに欧米やイスラーム諸国からの激しい批判を招き、ソ連経済の悪化にもつながった。

実際、経済面でソ連は深刻な状態に陥っていた。兵器の製造やアメリカとの軍事競争の影響もあり、経済改革は遅れ、多くの問題が先送りされていた。もっとも、国民の生活はそれまでの経済発展の成果のおかげで、ある程度の水準は保障されていた。そうしたことから国民は若干の問題があっても不満を抱く人は多くなかった。

1982年3月、ブレジネフは心臓発作を起こし、健康状態が悪化していった。それまでも彼の国家運営能力を疑問視する幹部や国民は少なくなかったが、この時点で彼がその能力を失ったことは明らかであった。会議では文書を読み込むことすらできず、テレビやラジオから流れてくる彼の発音の悪い長いスピーチは、多くの人にとって耳障り以外の何ものでもなかった。しかし、このような書記長は周辺の者にとっては非常に都合がよく、ほとんどの問題解決はブレジネフ周辺の幹部に任された。そのためソ連の経済問題や必要な改革は遅れ、凍結された。それはソ連崩壊にもつながることになる。晩年のブレジネフの指導力の欠如と、それが招いた状況の悪化は明確に現れ、国民もそれに気付いていた。

ブレジネフも他の政治家のように、初めの頃は積極的で改革派だったと思う。しかし、任期が長くなると意欲を失い、万事をほったらかしにした。それでソ連は壊れ始めた。ソ連の解体はゴルバチョフのペレストロイカではなく、ブレジネフの時代から始まったと言えるだろう。



ウズベキスタンのテルメズとアフガニスタンとの国境にあった橋を渡り、アフガニスタンから撤退するソ連軍の最終部隊。

ブレジネフの前の時代には、私たちは共産党員になることを夢見て、国と共産党のために燃え尽きたいという気持ちだった。しかし、ブレジネフ時代になると党員になることは、すなわち「権力を持つことと自分の子どもや孫の将来を保障する」ことだという考え方が（共産党員と一般人の間に）圧倒的に強まった。その後、ブレジネフ時代が終わりに近づくと、共産党幹部とマフィアの幹部が結託したり競合したりして、権力と国有財産を分け合うようになり、みるみるうちにすさんでいった。（証言者No. 43, ウズベク人、男性、コーカンド）

1982年11月10日の午前、ブレジネフはモスクワで死去し、赤の広場の元勳墓所に埋葬された。

## 2. ラシードフのリーダーシップ

### 2.1 政治家としてのラシードフ

ソ連時代のウズベキスタンに暮らした人の中には、ブレジネフ書記長の時代をラシードフ時代と認識している人が少なくない。シャラフ・ラシードフ（1917-83）はウズベキスタン共産党の第一書記であり、当時のウズベキスタン



における最高責任者であった。

1917年11月6日、ジッザフに生まれたラシードフは、ブレジネフと同じくロシア革命時は生まれたばかりだったため、革命運動に参加した経験はなかった。ラシードフが革命以後に台頭した新しいリーダーであることはブレジネフと共通している。そして、彼と前任者たちとの違いは、第一書記としての任期が誰よりも長かったことである。

ラシードフのキャリアは1935年にジッザフ教育専門職業学校を卒業後、小・中・高校の教師として勤めたことから始まる。彼には編集者としての才能があり、1937年から41年にはサマルカンドの『レーニン・ヨリ（レーニンの道）』という新聞社で副編集長を経て編集長になった。

1941年にサマルカンド国立大学の文献学部の通信課程を卒業するが、この年にドイツとの戦争が始まったため、ラシードフはソ連軍に入隊しドイツとの戦いに参加した。彼は1942年まで配属された部隊の共産党業務担当を勤めたが負傷し、1943年にサマルカンドに戻ると、再び『レーニン・ヨリ』の編集長を務めた。その活躍が評価され、1944年にはウズベキスタン共産党サマルカンド州委員会書記に任命され、1947年までその職を務めた。同年、『レーニン・ヨリ』よりはるかに規模が大きい党機関紙『キジル・ウズベキスタン（赤いウズベキスタン）』の編集長に任命され、これを1949年まで務めた。

ラシードフのジャーナリズムでの仕事ぶりや能力は非常に評判がよく、1949年から50年の間、ウズベキスタン作家同盟議長に選ばれると、国民や共産党幹部の間での知名度はさらに高まった。それが1950年のウズベク共和国最高会議幹部会議長への就任にもつながり、彼はこの重要なポストで1959年まで働くことになった。

ラシードフのキャリアのピークは1959年に訪れる。彼はウズベキスタン共産党中央委員会第一書記に任命され、国内でもっとも影響力のある政治家となった。モスクワの共産党中央委員会メンバーもラシードフを高く評価し、彼は1961年からソ連共産党中央委員会政治局員候補にもなった。さらにブレジネフが書記長に就任すると、彼とラシードフとの個人的な関係は密接となり、モスクワから全面的に信頼されるようになった。その結果、ラシードフのウズベキスタン国内での支持基盤は固まり、その影響力はこれまでにないほど拡大した。そ

れは単に政治的な権力に人々が屈するというものではなく、人柄や相手の言葉に耳を傾ける優れたコミュニケーション能力によって築かれたと考える政治家や国民は多い。

## 2.2 国民のラシードフ像

ソ連時代の指導者の評価で特徴的なのは、権力を握って強い実行力をふるっている間は褒めちぎり、引退すると今度は批判して中傷する傾向があることである。ラシードフもその例外ではなかった。

しかし、独立後のウズベキスタンでラシードフは英雄視され、彼の名誉回復につながった。それには二つの理由がある。一つはカリモフ政権にとって、ウズベキスタン国民を統合し、自己アイデンティティを確立するには人々を動員する国民的英雄が必要だったからである。歴史的人物のアミール・ティムールだけでは、そのような課題を解決することはできない。人々の記憶に新しく、尊敬される英雄が必要であり、それにはラシードフが最適だった。

国民のラシードフに対する意見は様々であり、彼と接触があった人はその時の印象を語り、そうでない人はラシードフのリーダーシップを観察して、その印象を述べている。その中でラシードフの仕事への姿勢は大変評価が高く、人柄や国民とのコミュニケーション能力を評価する人も非常に多い。しかも、そのような印象を持っていたのはラシードフと同じウズベク人や他の中央アジアの民族のみならず、以下のようにロシア人もかなりいる。

私がコルホーズで仕事をしていた時、彼はよく私たちのところに来てくれた。(警護はあまり付けず) お付きの人は数人で、彼が来ると農民はピラフを作り、皆で何時間も好きなことを話した。忙しいのに不機嫌な顔もせず聞いてくれて、非常に良い人だった。(証言者No. 39, ウズベク人, 男性, フェルガナ州)

このようにラシードフは共産党の幹部でありながら、国内の現場に出向き、労働者や農民と直接話をした。それが国民から評価され、ラシードフの人気は高かった。彼は時間がある時は自らの足で情報を集め、時間がない時は電話を使

ったり、その担当者と直接話をしたりして情報収集に力を入れた。国民は彼がいつも自分たちと共にいるような感覚を抱いていた。

私が国立スポーツ委員会で仕事をしていると、ラシードフからしばしば電話が入った。彼はスポーツを愛しており、定期的に予算関係の書類とイベントの企画書を持ってくるように言われた。

ある時、選手たちの旅費を工面できずに困っていると、彼はすぐに財源を確保してくれた。そんなふうには、あらゆる問題を自ら解決していた。きっと他の人なら自分の部下やその担当者に任せるところを、ラシードフは親身になって考えてくれた。私の彼に対する尊敬度は時が経つほど上がっていった。(証言者No. 9, ウズベク人, 男性, タシケント)

ウズベキスタン国民のブレジネフ書記長とラシードフに対する姿勢は大きく異なっている。同時期に活躍した同じ共産党幹部の2人ではあるが、職務に対する責任感はまったく異なり、私生活でも家族についての考え方にも異なる点が多かったようである。以下の証言をみると、そのような一般国民の評価の差は歴然としている。

私はラシードフとブレジネフを同じように扱うのは適当だと思わない。ラシードフは賢く、彼のマナーと人柄の良さにはいつも感心していた。

彼らの子どもたちを比べてもその差は明らかだ。ブレジネフの娘のガリーナは好き勝手に生活し、良くない噂が絶えなかった。それに対してラシードフの娘サヨラは非常に謙虚であり、父親のことを自慢したり、その名前を利用して何かを得たりしたという噂もなかった。ラシードフ一家は豪邸にも住んでいなかったし、大した財産も持っていなかった。

彼は私の仕事場だった科学アカデミーの総会にもよく来ていて、私たちの言い分に耳を傾けてくれた。(証言者No. 12, ウズベク人, 女性, タシケント)

このように国民からも、またブレジネフ本人からもラシードフへの信頼は厚く、彼は長年ウズベキスタンの最高責任者である共産党第一書記の職にとどまった。しかし、「綿花事件」もしくは「ウズベク事件」への関与でその地位を失うことになる。

### 2.3 ラシードフと綿花事件

この事件は1982年から83年に浮上したソ連史上最大の疑獄事件である。ブレジネフ時代、ソ連を世界最大の綿花生産国にするために、モスクワは綿花栽培に適した共和国に対して増産を働きかけた。綿花は「白い金」とよばれ、その価値がことさらに強調された。なかでもウズベキスタンは、ソ連における綿花生産の約6割を提供していた。乾燥した地域で生産力を上げるためには大規模な運河や水資源が必要であり、農業技術や支援も不可欠であった。しかし、中央政府は十分な支援や設備投資を行わず、綿花生産の増加を一方向的に要求するばかりであった。それがラシードフと彼の部下には過大な圧力となり、ラシードフ自身にとってはまさに死活問題となった。

彼は定期的にブレジネフから連絡を受け、そのたびに生産量は前年を超えられるか、あるいはソ連政府が目標とする基準まで届くか聞かれた。ラシードフはそのような無理な要求に抵抗したものの、その声はブレジネフや他の幹部には届かなかった。モスクワの要求に応じるために、ラシードフと彼の部下は生産量を水増しせざるを得なかった。このような水増し申告には、ウズベキスタン共産党幹部のみならず綿花栽培に関わった農場やその地方の共産党幹部も関与していた疑いがある。彼らは常に、上部から増産の圧力をかけられていたので、増産に失敗した時は、このような方法に頼らざるを得なかったのである。しかし、水増しされた綿花生産に対する不正な請求は法外な金額に上ることが明らかになった。

この一大疑惑の解明を指揮したのは、ブレジネフの後継者でKGB出身のアンドロポフであった。彼は、ブレジネフ時代に緩んだ綱紀の肅正に乗り出し、その一環としてラシードフにも疑いの目を向けた。ラシードフはその圧力に耐え切れず心臓発作で死去したが、自殺をはかったという説もある。ラシードフ亡き後に、「綿花事件」はその名を「ウズベク事件」あるいは「ウズベク綿花事件」

と名前を変え、驚くべきスキャンダルに発展する。

ソ連という計画経済の国でこのように大規模な不正が共和国レベルで行われていたとすれば、モスクワの共産党幹部がそれに気付かなかったとは想像しがたい。汚職は間違いなくあったとされ、ウズベキスタン国内だけではなくソ連共産党幹部までが関与した大事件として注目された。捜査はグドリャンとイワノフという2人の検事に任せられ、多くの人が逮捕され、実刑判決を言い渡された。ブレジネフやラシードフはすでに亡くなっていたので彼らの関与を証明することは困難だったが、ブレジネフの娘婿がこの事件への関与で逮捕された。

ソ連全土で捜査への支持や横領に対する厳しい措置を求める声が上がったが、ウズベキスタンの国民は異なった見方をしていた。綿花事件は政治的な意味合いが強く、捜査はすべてモスクワから指示されていた。モスクワの狙いはラシードフとウズベキスタンの指導部に圧力をかけ、これをつぶすことにあるとみたのである。

ブレジネフ時代のソ連を一言で言うと、それは混乱だ。どこをみても無責任な雰囲気漂い、アルコール中毒者も急増していた。国家機関に勤める役人の部屋の金庫には必ずウォッカが入っていた。大事な書類や秘密情報を守るための金庫にだ。

しかし、ウズベキスタンの第一書記にラシードフが就任してからタシケントは特に変わっていった。1966年の大地震の影響もあったが、地下鉄が建設され、大都市に生まれ変わった。

ラシードフはかわいそくに「ウズベク事件」でモスクワから様々な容疑をかけられ、グドリャンとイワノフのようなうす汚い検察官に結論ありきの取調べを受けて相当苦しんだと思う。（証言者No. 9, ウズベク人, 男性, タシケント）

ウズベキスタンの国民は、ラシードフはモスクワから到底達成しえないような綿花の生産量を要求されて水増しを行ってしまったが、彼の謙虚な私生活から判断して、その資金は自分のためではなく、ウズベキスタンのために使ったと信じている。首都であるタシケントのメトロ（地下鉄）や多くの建物は、巨



ブレジネフとラシードフがウズベキスタンの綿花畑を訪ねた際の一場面。

額の資金なしでは建設不可能であり、仮にラシードフが不正をしたとしても、それは国民のためであり、タシケントを改善、美化するためには仕方がなかったとみる人は多い。

国民は都市の住環境の改善を高く評価し、タシケントを今の姿に変えたのは彼がソ連政府からあらゆる方法を駆使して取りつけた支援のおかげだと考えている。

ラシードフ時代に私は大学を卒業し就職をして、結婚後に自分の家族を持った。ラシードフは私たちのためにたくさん建物を建ててくれた。例えば、ユビレイヌイ（スケートリンク場）、人民友愛宮殿、映画館、劇場など、どれも私たちにとって、家族や友人との思い出を作ってくれた施設だ。こうした施設のおかげで、ただ暇をつぶすのではなく、いろいろな文化にふれることができた。ラシードフはまさに国民のために生きた人だった。

ブレジネフがラシードフに綿花の生産量を上げるよう強く命じたために、多くの大学生や高校生が収穫を手伝わされていた。そんな私たちの大変な努力があって、（ウズベキスタンは）綿花を提供する共和国の中でトップになった。ラシードフは国民のためにモスクワから支援を得ようと水増しをしたのだから、私は今でも彼の政策と行動を支持している。（証言者 No. 36, ウ

ズベク人、男性、タシセント)

また別の証言にもラシードフに対する尊敬や支持とともに感謝の気持ちが現れている。ラシードフは単に財源を確保しただけでなく、ブレジネフとの親密な関係を国民のために利用したとも受け止められている。

彼は本当の意味で英雄だった。メトロや建物は共産党やエリートたちのために作ったのではないのだから、それはわれわれを愛した人にしかできないことだ。今でもメトロを建設するなんて難しいことなのに、ソ連の厳しい管理下で財源をウズベキスタンに持って来たのは神業としか思えない。

しかも、他の共和国の第一書記がKGBを恐れていた時代に、ウズベキスタンのKGBはラシードフを恐れていた。それはラシードフとブレジネフの間に特別な関係があり、ラシードフは何かあるとブレジネフのところに行って話し合っていたからだという。ラシードフは政治家としてとても優れた人だった。彼がモスクワの言うことを聞いたのは、モスクワとの関係を強化するためで、そうすることで私たちの暮らしを少しでも良くしようとしていたんだ。(証言者No. 22, ウズベク人、男性、ナマンガン)

これに似た証言はいくらでもある。以下の証言者もラシードフが水増しや不正請求をしたのであれば、それ以外に方法がなかったからだと言っている。

彼はよく列車に乗ってウズベキスタン各地を見回っていた。今の大統領の護衛隊のように武装し自動小銃を持った者はいなかった。外見だけではウズベキスタン共産党第一書記とはわからないほど、服装はとても地味で目立たなかった。

彼はモスクワに綿花を送る際に、その量を過剰に報告したと言われるが、彼にも圧力がかかっていたし、農民が苦しんでいる姿をみて、必要な量が出荷できなかった人々の分を過剰に報告したのだろう。(証言者No. 33, タター人、女性、アンディジャン)

このように綿花の水増し報告と不正請求は国民からそれほど批判されておらず、むしろラシードフがウズベキスタンにより多くの財源を確保できるように使った戦略とみられている。実際はどうだったのかは別として、彼らはラシードフの功績を高く評価している。

私は友人とモスクワに行った時、中心地から20キロほど離れたところで泊まることになった。夜、駅に降り立つと電灯がなくて真っ暗だったので驚いた。モスクワからそれほど離れていないのに、通りには電灯もなかった。それと比べると、ウズベキスタンではどこの駅にも電気が引かれているので、困ることはなかった。

綿花関連の問題はあったが、どの村にも電気が引かれ、誰もが十分な生活ができたのはラシードフのおかげだ。国民の評価は時間が下すと思う。綿花生産は私たちにとってとても苦しいことだった。そんな中で、ラシードフは生活環境を整え、食べる物と住む場所を提供してくれたのだから心から感謝している。(証言者No. 50, タジク・ウズベク人, 男性, プハラ市)

ラシードフの政治や国民との関係はこのように評価されているが、過大評価や先入観が影響している可能性もある。理由はいくつか考えられるが、まず、ラシードフ時代のウズベキスタンと現在のウズベキスタンにおける経済・社会状況を比べる国民の多くは、かつての生活向上を評価し、それに対するラシードフの貢献を過大に評価する傾向にある。

第二に、ラシードフをウズベキスタンの国益のためにソ連中央と戦った英雄とみなす一般人は少なくない。彼らからみると、ラシードフはソ連中央に対して綿花収穫の計画達成に関し虚偽の報告などをしたとはいえ、それはウズベキスタンの農民を苦しめないためであるらしい。そのような偽造によって獲得したお金も、彼の個人的資産ではなくウズベキスタン経済に投資されたと考えられている。

そして、ラシードフが一般国民に過大評価される第三の理由として考えられるのは、ソビエト政権と現政権によるラシードフの過小評価である。特に1980年代、ソビエト政権はラシードフをマフィアの指導者として描き、彼を強く批



判し、彼の死後には彼の同志を次々と裁判にかけた。マスコミは彼に関する捜査を「ウズベク事件」と名付けた。多くの人は、ウズベキスタンとウズベク国民全体が侮辱されたと感じた。そのような人たちからみれば、ラシードフは犯罪者ではなく、一般国民を代表した英雄であり、ソ連共産党の犠牲者でもある。これらの意味で、彼をシャヒード（犠牲者）としてみなす人は多い。

さらに、そのような見方に影響を与えているのは現政権のラシードフ評価である。現政権はある一面でラシードフを評価しているが、それは限定的である。横領などがしばしば報告される現政権と比べ、個人的に流用したことはないことも、ラシードフの高評価につながっていると思われる。

### 3. 日常生活の中での「黄金時代」

#### 3.1 時代の評価

現在、ソ連の1960–80年代の時代を「停滞の時代」と名付ける研究者は多い。しかし、以下の証言にもあるように、その時代は生活環境の面ではむしろ向上したと受け止められることもある。

彼らが「停滞の時代」を「黄金時代」とみなすには、いくつかの理由がある。まず、安定した社会への満足度を強調する人は多い。それに加えて、経済の向上と、何か問題が起こったとしても人々が互いに支え合い、解決策を見つけていったことである。日常生活を語る中で、当時の社会が持っていた長所と短所をすべて受け入れ、その雰囲気懐かしく思い起こす人も多い。

大半の人はブレジネフ・ラシードフ時代を語る時、その評価に消極的な部分はなく、良い部分ばかりを強調した。

私はブレジネフ・ラシードフ時代を良い時代として思い出す。悪いこともあったのかもしれないが、教育、医療などは無料で、教育機関のレベルも高かった。（証言者No. 48, タジク・ウズベク人, 男性, ブハラ市）

この時代の判断基準として生活環境を一番に挙げる人が多い。教育、医療など福祉の面からみても満足していたと語り、それはソビエト政権が可能にした

生活だったという。以下のように、停滞の意味そのものを問う人すらいる。

ブレジネフ・ラシードフの時代、特に何か問題が起きているという印象はなかったが、ブレジネフの死後にこれを「停滞の時期」とよび始める人が多くなった。私は「停滞」という言葉を聞いて、まずびっくりした。何が停滞だったのかよくわからなかったからだ。私たち（国民）は、高校や大学に進学して勉強し、就職もできた。教育は無料で受けられ、経済的にも困ることはなかった。

確かに、アパートを支給されるまで何年も待たなければならなかったが、それくらいのことであの時期を停滞と言えるのか。私たちはソ連のあちこちを旅し、それなりに貯金もしていた。今、どんなに給料がよくても、旅行することは不可能だ。人々は将来に不安を感じているので、お金があれば貯金をして、不動産などに投資するのが当たり前になっている。（証言者No. 29, ロシア人, 女性, コーカンド）

消費の面ではソ連時代は物がなくて、店は空っぽのイメージがあるが、彼らの時代には、もはや状況は異なっていたようだ。

ソビエト社会がもっとも活気付いていた時期だった。生活に必要な物はすべてあり、お店には何でもそろっていた。物は安く、自由に買い求めることができた。（証言者No. 26, タタール人, 女性, ナマンガン）

このような生活の安定は人々の関係にも反映され、大半の証言者が、人間関係は温かく、お互いに関心を持ち、日常の問題を解決するために力を合わせたという。そういう意味では、ソ連時代の安定感を評価し、経済的な豊かさだけではない社会の雰囲気懐かしく思う人も数多い。

私はまだ若かったが、悪いことは全然思い出せない。店にはあらゆる物があって生活がしやすかっただけでなく、皆思いやりがあってお互いのことを考えていた。生活状態が良かったから気持ちにも余裕が出て、他人に対し

て優しかったのかもしれない。(証言者No. 19, タジク人, 女性, サマルカンド)

以下の証言にもあるように、大半の人にとって当時の国家のあり方や社会の状態のバロメーターはあくまでも日常生活のレベルだった。彼らにとって政治は自分たちとは別世界のことであり、共産党の活動家や政府関係者でなければ、政治にはあまり関心を持たなかった。一番の関心事は家族の生活を維持することであり、ブレジネフの長いスピーチはすでに聞き飽きていた。

その典型的な例は以下の証言にみられる。人々は時の指導者をシャー(ペルシア語起源で「君主」)にたとえている。この証言からも国民と政治エリートの間に明らかな距離があることがわかる。

ラシードフがわれわれのシャーになったとは聞いたが、彼に会ったことはなかった。たまにテレビで綿花畑を歩き回っている姿をみたことはあったものの、彼については何も知らなかった。心臓発作で死んだとだけ聞いている。

実際のところ私は子どもたちが結婚するまで、家族を食わせていくことで精一杯だったので、政治のことはまるでわかっていなかった。生活する上で必要な物はすべてあり、家も建てることができたので満足していた。

道路がなくてバスが走っていない時代とは大違いだった。それでもバスは時間どおりに来ないので、子どもたちは毎日路上に出てはトラックを止め、その荷台に乗って大学に通うのだった。

ブレジネフが死んだ時のこともよく覚えている。葬儀の様子をテレビで放送していた。彼の死後、頭に痣がある新しいシャーが出てきた。ゴルバチョフという人だった。ゴルバチョフはブレジネフ以上に演説が長くて内容も複雑で、まったくと言っていいほど理解できなかった。(証言者No. 25, ウズベク人, 女性, ナマンガン)

### 3.2 経済状況

この時期のウズベキスタンをはじめとする旧ソ連の共和国は様々な経済問題

に直面しており、しだいに経済面では停滞期とよばれるようになった。そんな中でウズベキスタンの経済は成長を続け、生活水準の上昇にもつながった。特に戦争が終わって苦しい生活を送っていた時期に比べると、この1950-80年代は多くのウズベキスタン人の生活にゆとりをもたらした。

1946年以降は貯金ができるようになり、私は結婚して子どもができて、生活が少し安定してきたように思えた。

夫は運搬トラックの運転士で、元軍人だったので、よい給料をもらっていた。そのお金でキビトカ（地面から0.5メートルほどの高さで作られた一時的に住む家）を買って生活を始めた。しかし、私たちはそこに9年間も住んでいた。

タシケントに大地震が起きた後、新しい建物がどんどん建てられ始めた。夫はとても謙虚な人で、自分からアパートやマンションが欲しいとは恥ずかしがって言わない人だった。しかし、他の地域からタシケントに来て、長年そこで仕事をしていた私たちよりも早くアパートを手に入れた人たちをみた時は、さすがに悔しがった。それでも夫は「頭の上に屋根がない人が先に入居するのは当然だろう」と言って、自分から申請することはしなかった。

彼の上司がその状況に気づき「すでに9年間運転士として働いているのだから、もうアパートをもらってもよい時期だよ」と、夫に代わって申請書を出してくれた。そして、職場の共産党組織にも夫を強く推薦してくれたので、私たちはアパートに入ることができた。しかし何らかの手違いで、本来は3LDKの部屋をもらうはずだったのに、2LDKしかもらえなかった。

私が夫を責めると「いずれ娘はお嫁に行き、息子はお金を貯めて自分で新しいアパートを買うんだから、私たちにはこれでもまだ広く感じる時が来るよ」と、誰にも文句を言わなかった。（証言者No. 3, ウズベク人, 女性, タシケント）

ソ連の経済力と福祉制度に人々は満足していたようにみえる。

私はコルホーズの売店で日用品などを扱っていた。欲しい物が買えて、気

持ちの面でも「満腹」だった。生活水準は今よりも良かったと感じている。

今との違いは過剰な利益や財産を得てはいけなかったことで、賄賂など存在しなかった。私はコルホーズで栽培していた作物をコルホーズの依頼で売りさばき、そこから得たお金で大学（通信部）に入学した。2ヶ月間の集中講義と修了試験のためにサマルカンドに行き、刺激のある毎日に満足していた。

当時の政策関係の話は私は知らないし、そもそも一般人は政治に参加しようと思っていなかった。私たち農民は、仕事をしっかりこなすことしか頭になく、10月の革命記念日までに達成しなければいけないノルマがいくつもあり、ノルマ以上のことをやろうとしていた。

私の当時の給料は200ソムで、結構高い方だった。それは家族が生活していくのに十分だったし、年末のボーナスもたくさんあった。当時の政府は労働者のことを考えていたんだと思う。（証言者No. 21, ロシア人, 女性, サマルカンド）

人々は、給料が良かったこと、食べ物や洋服が買ったこと、他の共和国に行ってそこで暮らす人々の生活や考え方を学んだことなどを懐かしい経験として挙げている。安定した社会のおかげで貯金に執着せず、お金が貯まれば旅行をするなどして自分たちの生活を充実させていた。

私はあちこち旅して、いろいろなところを見て回った。政治や経済にはあまり関心がなかったのだから、そうしたことについてはよくわからなかったが、決して悪い時代ではなかった。

私たちの家族は派手な生活をしていただけではなかったが、ある程度水準は維持できていた。例えば、車や冷蔵庫、テレビ、洗濯機を買い、3年に一度は家のリフォームをしていた。

タシケントの1970-80年代は今と比べるといま一つなのかもしれないが、給料がもらえ、夏の休暇には旅行ができ、そして子どもの結婚資金を貯めることもできたので、皆生活を楽しんでいた。（証言者No. 10, タタール人, 男性, タシケント）

人々が生活に満足して何も望まなくなることこそが、ソビエト政権がめざした新しい社会であり、人々はそれに気付いていなかったという意見もある。そう考える人は、物がありあふれた状態に加えて、共産主義が描く平等を意識した完璧な社会を達成したとみる。

皆互いを兄弟のように思って接していた。誰かを無視することもなく、お金持ちだとか、貧乏人だとかいう区別そのものがなかった。

店は品揃えが豊富で、たまに人気のある商品をあえて店の棚には並べず、本来の値段よりはるかに高く売るポド・ブリラフカというやり方で販売している店はあったものの、手が出ないくらい高かったわけでもなく、それで困っていた人はいなかったと思う。<sup>2)</sup> (証言者No. 29, ロシア人, 女性, コーカンド)

しかし、ソ連経済にはしだいに深刻な問題が現れ始め、政府はその対応に追われていた。それについては多くの人が記憶している。なかでも、うまく機能していなかった農業政策と綿花栽培の悪影響を挙げる人が多数を占めている。学生時代、強制的に綿花の収穫に動員され、そこから逃れることも、効率よく作業することもできなかったと、皆口をそろえている。それは余裕のあった生活が終わりに近付いたことを意味していた。計画経済はしだいに機能不全の状態に陥りつつあったのである。

ブレジネフとラシードフの時代は、物が安くて何でも手に入り本当に良かった。しかし、唯一私が不満に思っていたのは、綿花の収穫に若い女性やまだ幼い子どもまでも動員して、何ヶ月も手伝わせたことだ。若い女性の健康を脅かしてまですることではなかったと思う。(証言者No. 1, ウズベク人, 男性, タシケント)

2) この証言と同様の証言は、ロシア在住の人からも聞かれることから、ソ連全域において似たような状態があったようである。ソ連時代の行列と購入方法については、Natal'ya Kozlova, *Sovetskie lyudi: Stseny iz istorii*, Moskva: Evropa, 2005, 412-417頁参照。

政府関係者と一般の人とでは、女性や子ども、学生などを綿花の収穫に動員したことに對し見解が異なる。政府は綿花の収穫を手伝うことは愛国心を發揮する機会であり、ウズベキスタンのみならずソ連の綿花自給力を上げることへの貢献になると主張した。しかし、一般の人々は、学生を動員したのは農民よりも安く使えたからに過ぎないとみている。しだいに管理はずさんになり、収穫が終わった畑に都市部から人が連れて來られることもしばしばあった。

学生の労働を管理していた人は、農民も彼らの動員を歓迎していなかったと言う。

私は医療系の大学に勤めていた。規律の多い時代の中で、特に厳しい目が向けられたのは綿花の収穫だった。

私たち教員は学生たちを綿花収穫作業に連れて行かなければならなかったが、まずその前に現場に足を運び、食事をする場所や調理に必要な包丁や鍋などがあるか、学生が泊まる場所やその準備が整っているかなどを確認しながらみて回った。そうした準備の大半は農民がやっていた。しかし農民は学生の仕事を低く評価しており、學生が來ることを望んでいなかったように思う。(証言者 No. 32, ウズベク人, 男性, アンディジャン)

学生の大半はこの動員を、政府による見せかけのものだと勘づいていた。当時、学生だった人は以下のように話している。

綿花は実際に収穫された量よりも多くモスクワに報告されていた。私たち学生も何かおかしいと思っていた。

例えば、9月13日に収穫に連れて來られて、12月28日に歸されたが、私たちが綿花畑で働いたのは11月5日までで、残りの日はすることがなくて暇をもてあそんでいた。朝ご飯を食べると畑まで歩いて行き、お昼はそこで食べるといった具合だったが、畑までは数時間かかり、着くと昼になっていた。お昼を済ませると、また歩いて宿泊キャンプまで戻るのがだった。2ヶ月近く何もせずにふらふらしていたことになる。雪や雨が降ると、もう最悪ですることがないままキャンプの中で過ごさなければならなかった。(証言者

No. 5, タタール人, 男性, タシケント)

こうした動員は、学生の学力にも影響した。ソ連時代の大学教育は5年、学生が綿花畑で過ごす期間はそのうちの1年以上にも及ぶ。学習時間が削られる分、専門知識はそれほど身に付けられず、仕事に就いたとしても期待されるほどの力は発揮できないということもあった。

このような問題点に気付いていた人はいたが、反対すれば反国家的な宣伝という罪で逮捕されたり、解雇されたりすることもあったことから従うよりほかはなかった。

ブレジネフ・ラシードフ時代の悪いことと言えば二つある。

まず、政府も現地の役人も綿花の収穫に夢中になり、中学生から大学生までを年に3～4ヶ月も畑に連れ出し、綿花を収穫させたことだ。それによって彼らの学力は低下し、健康にも悪影響を及ぼした。

かわいそうなことに、学生たちは大学を卒業しても、あまり知識は身に付いていなかった。それで国民全体の学力も下がってしまい、今のウズベキスタンのような有様になってしまったのだ。

二つ目は、それでも優秀な若者はいたのに、海外に留学する機会を与えなかったことだ。これはウズベキスタンにとって非常に残念なことだと思っている。(証言者No. 2, ウズベク人, 男性, タシケント)

## ま と め

多くの専門家は、この時代がソ連の政治・経済の発展という面で低迷期であったと結論付ける。ソ連の歴史に関する多くの文献でも、ブレジネフがソ連共産党の書記長であった時代がソ連の解体の始まりであり、これまでに活気があって発展してきた国において、様々な面での停滞を引き起こしたと分析する。

しかし、一般国民の見方はそれと異なっている。多くの人はこの時期を黄金の時代と考えており、社会の安全保障、個人に与えられた権利と自己能力の向上の可能性の面では、これまでも、そして今後においても予想することのでき



ないような可能性を人々の間に広げたと認識している。

一般国民と政治家・専門家の意見の不一致がみられる理由にはいくつかの点が挙げられる。

まず、多くの専門家は、この時期を評価する際に政治やガバナンスのあり方、政権と一般国民間の関係、政治体制の本質などを評価の基準にするが、一般国民は生活水準という目線でその時代を評価する。確かに、この時代にウズベキスタンをはじめとするソ連全体の政治史の中で、優れた政治制度が出来上がっていたとは言い難いが、その反面、一般国民の生活はこれまでないほど充実し、生活水準は上がった。多くの医療機関や教育機関が作られ、娯楽施設も建設された。そのように一般国民の生活が保障されたことから、多くの人々はソ連の政治イデオロギーが正しく、共産主義・社会主義的な新しい形の社会を作っていくことを心から信じるようになった。

一般国民にとって生活も確保され、将来の夢を描ける、まさに黄金時代に思えたのであり、その後経済問題が深刻化し、政治の安定性にも多くの課題がみえてくると、その時代を黄金の時代として記憶する人は増えていった。